

学会発表におけるポスターセッションの位置付け：「日本分子生物学会」と「日本認知科学会」を対象とした調査に基づく考察 Scientists' View on Poster Sessions: a Survey on Biology Molecular Society of Japan and Japanese Cognitive Science Society

加 藤 史 子*

Fumiko Kato

Abstract

Poster presentation is a form of research presentation in scientific meetings. A presenter stands in front of his/her poster during the poster session, explains the research outcomes when requested and discuss with the audience. There are some difference in features between poster presentation and oral presentation. The purpose of this research is to clarify the nature of poster presentation, chiefly from the viewpoint of presenters. The scientists' views of poster presentation are surveyed in the questionnaire method, referring the literature and the preliminary research conducted by the author. Focuses are on the following points:

1. Which form of the presentation is ranked high in scientists' view?
2. Which tend to be selected?

The questionnaires distributed to 140 scientists, 70 belong to the Biology Molecular Society of Japan (BMSJ) and another 70 belong to the Japanese Cognitive Science Society (JCSS). These societies are selected by reason that they may have different conventions in research. Responses were 39 (response rate was 55.7%) from BMSJ and 29 (response rate was 41.4%) from JCSS. The results were as follows. Some scientists (18, 26.5%) don't regard poster presentation as inferior means of presentation, on the other hand, some fear that the audience regard poster presentation as inferior means of presentation. The scientists (53 in 65 as audience, 81.5%; 55 in 56 as presenters, 98.2%) felt that the advantage of the poster presentation is possibility for scientists to have an opportunity to discuss in face to face mode. Poster sessions provide scientists with opportunities to extend networks of informal communication. One of the disadvantages of the poster presentation is that presenters of the session can not attend presentations of another presenters at the same session.

* : 平成7 (1995) 年度愛知淑徳大学文学部図書館情報学科卒業

Graduated from Department of Library and Information Science, Aichi Shukutoku University in March 1996
JOURNAL OF LIBRARY AND INFORMATION SCIENCE. Vol. 11, p. 9 - 30(1997)

1. はじめに

1.1 ポスターセッションとは

研究者は、自分のたてた課題を解決しようと研究し、その成果を発表する。そして、そこには一般的に、

少数の身近な研究グループへの発表→

大規模な学会での発表→

学術雑誌での発表

という一連の流れが存在している。

研究者は、ある程度の先取権を確保しておくと同時に、研究成果に対する他の研究者の意見や批評を得るために、また方々から集まってくる仲間である研究者との情報交換をするために、そして知識の普及のために「学会発表」を行い、その後「学術雑誌」に論文として研究成果を公表しているのである [01] [02]。

この一連の流れの中に存在している「学会」で、研究者はどのように発表をしているのだろうか。

研究者は、今まで学会発表となると、演壇に立ち、スライドやOHPまたは配布資料を使い口頭で発表をし、そして聞きに来ている他の研究者との質疑応答を行っていた。最近ではスライドやOHPだけでなく、コンピュータを利用するといったことも行われるようになってきているが、根本的には口頭で発表し質疑応答を行うというのが、従来から行われている口頭発表である。

このように今までは口頭で行われていた学会発表だが、現在とても大きな問題に直面している。その問題とは、学会発表を希望して提出された演題数が増加しすぎて、すべてを学会の大会期間内に消化することができなくなり始めている、ということである。この問題を解決するには、いかに短時間で多くの演題数をこなすことができるようにするか、ということにかかっている [03]。このような状況のなかで、考え出されたのが「ポスターセッション」である。では、このポスターセッションとはどういうもの

なのだろうか。

ポスターセッションとは、学会の部会の1つである。つまり、今までは口頭による発表ばかりであった学会発表に、新しい発表の手段の1つとして、発表者がポスターの横に立ち、他の研究者に研究内容を説明したり議論ができるポスターによる発表が現れたのである。

すなわち、口頭発表とポスターセッションは、学術情報の流過程において発表メディアとして位置づけられるのである。

さて、ポスターによる発表とは、どのように行われるものなのだろうか。

図1は、あるポスターを縮小したものである。タイトル、著者名、所属に引き続き、抄録、序論、分析、結果、結論といった学術論文と同じような構成をとり、図や表を多く用いながら、そして大きな文字で書くことによって、見聞しに来ている研究者に視覚的にも訴えているのがわかる。

そして、このようなポスターを、発表者は会場内に設置されている掲示板のなかで、自分に割り当てられているスペースに、貼ることによって、発表を行うのである。そして、発表者は自分のポスターが貼ってある場所に立っており、そこで見聞しに来た研究者に研究内容を説明したり、じっくりと議論をしたりすることができるのである。一方、見聞しに来ている人々は、あらかじめ要旨集や予稿集などから自分の興味のあるものを選んでおいて、それだけを見聞することもできる。または会場の中をぐるぐると歩き回りながら、いろいろな発表を見聞することもできるのである [04] [05] [06]。

次に、ポスターセッションの歴史をみていくことにする。従来は口頭発表ばかりであった学会発表に、ポスターセッションが初めて現れたのは、いつだったのだろうか。

ポスターセッションは、1970年にスイスで開催された、国際生化学連合 (IUB, International Union of Biochemistry) の大会である The 8th International Congress of Biochemistry で始

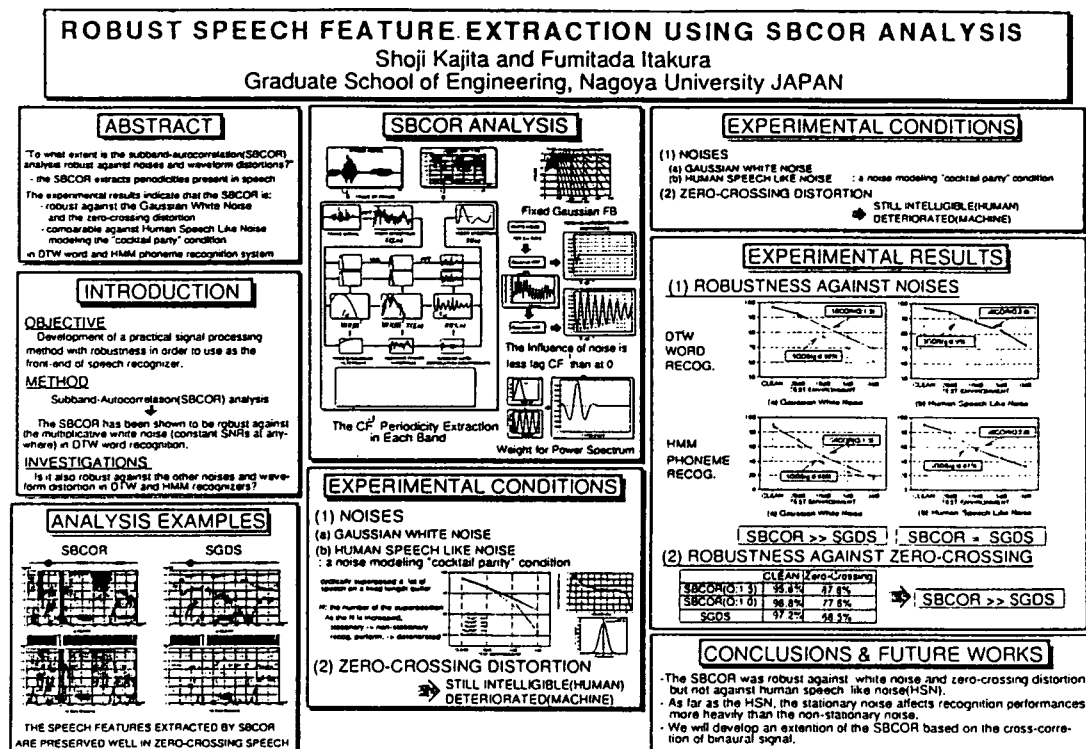


図1 ポスターの例

注記 本図は、名古屋大学工学部の方から提供いただいたものである。

められたといわれる [04] [05] [06]。そして1974年には、アメリカのミネアポリスで開催された The Biochemistry/Biophysics 1974 Meeting でポスターセッションが行われており、この年までにアメリカの主要な学会にも導入されたことがわかる [04] [05] [06]。

つまりポスターセッションは、その年はヨーロッパで開催された生化学の分野の学会で始まり、4年後にはアメリカの学会にも導入されている。そして、このアメリカの学会も生化学、生物物理学の分野の学会であった。1970年代に現れたポスターセッションは、その後一般的となっている。

1.2 ポスターセッションに関する文献

ポスターセッションに関しての知識を得るには、Maugh の文献 [04] が重要である。1.1

節でも触れたように、ポスターセッションとはこういったものなのか、ということについて大まかな知識を得ることができる。また初めてポスターセッションがアメリカの学会に現れた The Biochemistry/Biophysics 1974 Meeting についてもくわしく述べられている。発表を希望して提出された論文数が多すぎて、すべてを口頭発表で扱うための場が不足してしまうのでポスターセッションが採用された、というこの学会がポスターセッションを始めることになった経緯や、発表希望者は抄録を提出したときにポスターで発表したいかどうかを尋ねられ、最終的には約2,200の発表演題数のうち、ポスターセッションという考え方に反対しなかった人だけ約500人がポスターで発表し、そして成功に終わったということなど、この学会でポスターセッションがどのようにして行われ、どのような評価を得たのかということがくわしく述べら

れている。

また Stibic の図書 [05] や森川らの図書 [07] の中でポスターセッションに触れている部分があるが、これらもポスターセッションの入門として、とても参考になる。

ところで、ポスターセッションのみに焦点をあてた入門書もあるが、原物は確認できていない (Singleton, A. *Guide to Poster Sessions*. Oxford, Elsevier, 1984.)。

なかには、電話では話をしたことがある研究者らがある学会のポスターセッションで発表することがわかり、初めて顔を合わせて話をすることができると期待していたのに、ポスターの前には誰も人がいなかった、という体験をした著者が、口頭発表とポスターセッション、この2つの発表メディアには同じ価値があるかどうか、という観点から論じている文献もある [08]。

そして、文字の大きさは遠くからでも見えるように大きくしなければならない、などといったポスターの作成や準備、発表の仕方などを数値を示したりしながら説明しているマニュアル的な論文は数多くあり [09] [10] [11] [12] [13]、また森川らの図書 [07] でもポスターの作成や準備、発表の仕方についてくわしく説明されている。なかには、発表を申し込んでから発表当日までを1週間単位、1カ月単位に区切り、その期間中にしなければならない準備について述べている文献 [14] [15] や、文字を拡大することについて [16]、ボードや場所による照明の当たり方について述べている文献 [17] などもある。

しかしポスターセッションの実態を明らかにしようとした研究は、1978年に開催された The Institute of Information Scientists でのポスターセッションを対象とした調査 [06] 1件のみである。

この The Institute of Information Scientists でのポスターセッションは、一般に募集したものではなく、学会の事務局側が依頼した9件のみであった。この9件のポスターによる発表者、

および発表を見聞しに来た参加者に対してアンケート調査やインタビューを行っている。その結果として、ポスターセッションは楽しくて有意義であったということや、話をしたいと思っていた発表者と話をすることができた参加者は約半数だけだったということなどが示されている。また、口頭発表では不可能な、発表者や他の参加者と親密な議論をすることが可能な点がポスターセッションの長所だと示されているが、現在様々な学会で行われているポスターセッションでも長所だと思われるのだろうか。最後には、ポスターで発表されたものは口頭発表よりも劣るとみなされてしまうという考えを研究者が持てしまい、ポスターでの発表を拒否するようになるかもしれない、準備に時間をかけなくなってしまうかもしれない、という問題点も明らかにされている。

前に示した Naryshkin [08] も自分の失望した体験から、ポスターセッションは口頭発表と同等とはみなされていない、と考えている。また The 32nd Annual Scientific Meeting of the American Society of Cytology での会長あいさつで、会長自らが口頭発表と比べてポスターセッションのことを受け身で興味をそそらない、とあいさつしていることにも触れている。その後、この学会では、口頭発表とポスターセッションには同じ価値があるとみなしていると Call for Abstracts (発表の募集要項) に記すことによって、学会の方針としては同等だとしている。

このように、ポスターセッションと口頭発表とに同じ価値があるとみなしているかは、人により、学会により様々である。では、実際に現在の研究者や学会はポスターセッションのことを、口頭発表よりもランクが低い発表メディアだとみなしているのだろうか。また、なぜポスターセッションは口頭発表よりもランクが低いというような考え方が出てくるのだろうか。

このように、ポスターを作成したり、発表の仕方を学ぼうとするときに役立つマニュアル的

な文献はたくさんある。

しかし、どの分野のどの学会でどれくらい行われているのかということは、わかっていない。実態調査は16年前に行われたものが1件あるのみで、ポスターセッションが始まってから約25年経ち、より良くなりつつある現在のポスターセッションに関して、例えば研究者はポスターセッションをどのようにとらえているのか、学会の方針としてポスターセッションはどのような立場にあるのか、ということなどはまったく調査がなされていない。

1.3 調査目的

本研究では、ポスターセッションの主体者である研究者を対象にアンケート調査を行うことにより、研究者、主に発表者の立場からみたポスターセッションの特徴を明らかにすることを目的とする。

具体的には、発表メディアとしてのポスターセッションの特徴、つまり研究者はポスターセッションに何を求めているのか、研究者のポスターセッションに対する意識を明らかにすることを目的としている。

2. 予備調査

2.1 予備調査の目的と方法

本研究ではどのような項目をたてて調査を進めるべきか、ということの参考にするため予備調査を行った。予備調査では面接法を用いた。

異なる分野で行われているポスターセッションの状況を知るために、医学、分子生物学、工学の研究者でポスターで発表したことがある3名（A、B、C）に質問した。3名の所属、及び地位は以下のとおりである。A（東北大学医学部講師）、B（名古屋大学理学部分子生物学科助手）、C（名古屋大学工学部助手）。

質問から引きだそうとしたポイントは、

①ポスターセッション全般に関して

②ポスターセッションの長所・短所の2点である。

2.2 予備調査の結果

A、B、Cそれぞれについて、引きだそうとしたポイントに従って回答の内容を分類した。また、引きだそうとしたポイント①～②にあてはまらないような意見もあったので、それらについては③その他に分類した。

調査対象A（医学）

①ポスターセッション全般に関して

a) 大きい学会の学術集会は、発表演題数も多く、そのためポスターセッションを行っているところも多い。反対に、小さい学会では、発表演題数が少なく、口頭発表だけで間に合う。

b) ポスターセッションは費用がかかる。

調査対象B（分子生物学）

①ポスターセッション全般に関して

a) 小さい学会では費用がかかるので、ポスターセッションをやらない。

b) 発表演題数が多いときに、ポスターセッションならば同時にたくさんの発表をすることができる。

②ポスターセッションの長所・短所

a) 1対1で討論ができる。

b) こまかくやりとりができる。

c) 学会が終了した後での、時間外のつきあいもできる。

d) 参加者（見聞しに来ている人々）の反応がわかる。

e) 口頭発表のように、発表時間を気にしなくてもよい。

f) あらかじめ要旨集を読んでおくことで、見聞してみたい興味のある発表だけを見聞することができる。

- g) 発表者がその場にいらなくても、情報がすべてポスターとして存在する。
- h) 外国で開催される学会で、英語がわからなくてもポスターを見れば、おおよそは理解することができる。
- i) ポスターセッションの方が準備がたいへん。(口頭発表ならば、発表原稿と OHP やスライドを準備するだけだが、ポスターは色や配置なども考えなければならない。)

③その他

- a) あまり説明はしないようにして、まずは見てもらい、質問されたら答えるようにする。
- b) ほとんどの学会でやっているように思う。
- c) ポスターセッションは、まだ発表経験も少ない、若い研究者にとっても大きなチャンスとなるだろう。
- d) ポスターセッションは新聞と同じである。つまり、目がいったものから見る。見たいものだけを自分で選択することができる。これに比べて、口頭発表はテレビと同じである。一瞬で、一方通行である。
- e) 会場に行くまでわからないのでどうすることもできないが、ボードの色や木目によってポスターの印象が変わってしまう。
- f) 企業や研究所もポスターで発表しているが、そのポスターがとてもきれいに作成されている。企業や研究所の威信をかけているのだろう。

調査対象C (工学)

②ポスターセッションの長所・短所

- a) 年配の研究者ならば学会に顔見知りの人も多いだろうが、若い研究者は、ポスターセッションを通して意見の交換をし、顔見知りになることができる。
- b) プレゼンテーション能力を生かすことができるのは、口頭発表の方である。

③その他

- a) 発表時間中は、ずっとポスターの前にいる。(ポスターだけになることはない。)

- b) 10分、5分、3分で研究内容を説明できるように準備している。
- c) 自信があるときには口頭で発表する。そして自信がないときや、もう少し他の人の意見を聞きたいときにはポスターで発表している。
- d) カラーのポスターは、まだ少ない。

以上の結果からわかったことを列挙してみる。なお結果のどの部分を指しているかを示すために、A-①-aのように表すことにした。前から順に、調査対象者、質問から引きだそうとしたポイント、そのポイントの中の左端のアルファベットに対応している。

まず、口頭発表と比べてどちらが優れているかとは一概には言えない(C-②-b, C-③-c)。B-②-a, cとC-②-aから、インフォーマル・コミュニケーションへの活用が指摘されていることがわかる。ポスターセッションには長所も短所もある(B-②, C-②-a)。このように一長一短のポスターセッションと、すぐには優劣をつけることができない口頭発表と、どちらで発表するかということを選択するとき、その判断基準は人それぞれなのだろう(C-③-c)。

そして、発表者がその場にいないということ、どのようにとらえているのか、ということもわかった(B-②-g, C-③-a)。参加者に対する接し方も、人それぞれなのだとわかった(B-③-a, C-③-b)。

3. 調査方法

調査は質問紙法を用いて、「ポスターセッションに関する調査」というアンケートを「日本分子生物学会」と「日本認知科学会」、それぞれの学会に所属している研究者を対象に実施した。

なお、本論文では、調査項目の一部分、及び集計結果のくわしい数値については、割愛した。そのため詳細については、著者の卒業論文[18]をぜひ見ていただきたい。また、調査票につい

ては、付録として最後に示してあるので、そこらを見ていただきたい。

3.1 調査項目

予備調査の結果や文献を参考にして、以下に示すような調査項目をたてた。この調査項目は、アンケートの基となる重要な部分を占めている。つまり本研究で明らかにするためのポイントすべてを表しているのので、これについてみていくことで、本研究の目的が達成されるはずである。

- (1) 口頭発表と比べての優劣
- (2) ポスターセッションの長所と短所
- (3) インフォーマル・コミュニケーションへの活用
- (4) 発表の際にどちらを選ぶか
- (5) 発表者が不在の場合
- (6) 参加者に対する接し方

各項目について、どのようなことを調査しようとしているのか示すことにする。

(1) 口頭発表と比べての優劣

文献 [06] [08] からわかるように、ポスターセッションと口頭発表とに同じ価値がある、とみなしているかは人により、学会により様々である。

そこで、研究者はポスターセッションのことを口頭発表よりもランクが低い発表メディアだとみなしているかどうかを明らかにする。

(2) ポスターセッションの長所と短所

文献や予備調査でポスターセッションの様々な長所と短所が示されている。

そこで、どのような事柄を研究者はポスターセッションの長所・短所として、とらえているのかを発表者・参加者両方の立場から明らかにする。

(3) インフォーマル・コミュニケーションへの活用

文献には、発表者や他の参加者と親密な議論

をすることが可能な点がポスターセッションならではの長所として論文 [04] [06] にも、入門的な図書 [05] [07] にも示されていた。そして予備調査から調査対象BもCもポスターセッションを通して1対1での議論や顔見知りになることが可能だ、と考えていることがわかった。発表者と参加者と1対1あるいは少人数で親密にじっくりと議論をしたり、今まで知らなかった研究者と知り合いになることができたり、学会が終わってからも連絡をとりあうようになる可能性もある。

このように、研究者はポスターセッションを活用することによって、インフォーマル・コミュニケーションのネットワークを広げている、といえるのではないだろうか。

そこで、インフォーマル・コミュニケーションに関わると考えられる「1対1や少人数での議論」と「今まで知らなかった研究者と知り合いになることができる」という2つについて、発表者として、参加者として、研究者はどのようにとらえているのかを明らかにする。

(4) 発表の際にどちらを選ぶか

学会に発表を申し込むとき、学会の方針にもよるが、一般的にはポスターセッションと口頭発表のどちらかを希望することができる。予備調査で、調査対象Cは研究内容に自信があるときには口頭で発表し、自信がないときや、もう少し他の研究者の意見を聞きたいときにはポスターで発表する、と言っていた。

このように、もしどちらか一方を選択できるとしたら、どちらを選ぶとするのか、そしてその理由としてどのようなものがあるのかを明らかにする。

(5) 発表者が不在の場合

ポスターセッションは発表者がその場になくても（＝不在）掲示されているポスターから研究成果を見て理解することができる、という口頭発表にはない面を持っている。発表者が不在というのは喜ばしいことではないと思われるが（現に予備調査で調査対象Cは発表時間中は

ずっとポスターの前にいると言っている), 調査対象Bは発表者がその場にいないでも情報がすべてポスターとして存在していると言っており, 発表者が不在ということをそれほど悪いこととはとらえていないように感じられる。

発表者が不在ということを参加者はどのようにとらえているのだろうか。ところで調査対象Cのようにずっとポスターの前にいる発表者は, 自分と同じ発表時間帯の他の人のポスターを見聞できないことになってしまう。このことを発表者はどのように考えているのだろうか。この2点を明らかにする。

(6) 参加者に対する接し方

予備調査から, 調査対象Bは参加者に対して, あまり自分から進んで説明はしないようにして, まずは見てもらい質問をされたら答えるようにしていることがわかった。

そこで, 発表者は参加者に対してどのように接するべきだと考えているのかを明らかにする。

ところで, 予備調査では医学, 分子生物学, 工学の研究者1人ずつを対象としたが, 分野の違いによるポスターセッションのとりえ方にはあまり大きな違いは現れなかった。調査対象者数を増やして, もっとくわしく調査を行えば, 分野による違いなども明らかにできるかもしれないが, 本研究では割愛する。

そのかわり, いろいろな分野が集まっている学際的な学会と, 学際的というよりはむしろ専門分化した学会とに違いがあるかどうかを比較してみることにした。

なぜ学際的な学会と専門分化した学会とを比較するかといえば, 学際的な学会では, 自分の専門分野とは異なる他の研究者の発表がわかりにくいということや, 顔の知らない研究者が多いということもありえるが, ポスターセッションにおいては自分の専門分野とは違う内容の研究についても, 気軽に質問や議論をしたりしながら広く顔見知りになることができると考えている研究者がいるかもしれない, つまり, 学際的な学会に所属している研究者ほどポスターセッ

ションを好む傾向があるかもしれない, と考えたからである。

3.2 調査対象

調査対象は, 「日本分子生物学会」と「日本認知科学会」, それぞれの学会に所属している研究者である。

対象となる研究者は, それぞれの学会の学会員の名簿を利用することによって, 学会に所属している研究者を70名ずつ無作為に抽出した。

なお, 日本分子生物学会に所属している研究者に関しては, 1995年8月上旬に調査票を郵送して, 最終しめきりを9月末とした。日本認知科学会に関しては, 1995年9月上旬に郵送して, 最終しめきりを10月中旬とした。

対象となる学会を選ぶ際には, 日本の学会であって, ポスターセッションが行われており, そして適当な規模を持っているということを考慮した。また, 3.1節の最後でも述べたように, 学際的な学会と専門分化した学会とを比較するためにも, 一方には学際的な学会を選ぶことにしていた。これらを考慮して選んだ学会が「日本分子生物学会」と「日本認知科学会」である。

4. 結果と考察

日本分子生物学会と日本認知科学会, それぞれの学会に所属している研究者70名ずつに調査票を配布した結果, 日本分子生物学会では39通(回収率55.7%), 日本認知科学会では29通(回収率41.4%)を回収することができた。

そして回収した調査票に対して, 日本分子生物学会については1で始まる3桁の一連番号(101~139)を, 日本認知科学会については2で始まる3桁の一連番号(201~229)を1枚1枚に付与した。今後, 1枚の調査票つまり特定の研究者を指すためには, この番号で表すことにする。

しかし、両学会を合わせても回収数は68通と少ないため、すべてを統計的に処理することはできない。そこで、ここでは調査から得られた事実を3章で示した調査項目にそってみていくことにする。

4.1 口頭発表と比べての優劣

「ポスターセッションは、口頭発表よりも審査基準が緩やかでランクが低い発表の枠」だとみなしている研究者は、日本分子生物学会の方には7人（全体の18%）、日本認知科学会の方には10人（35%）いることがわかった。そこで、この17人についてくわしくみてみることにする（表1参照）。

なお表1の中では、自分がポスターで発表をしたことがあるかどうかについて、発表をしたこともあり他の人の発表を見聞したこともある場合を○・○、発表をしたことはないが見聞したことがある場合を×・○、発表をしたことも見聞したこともない場合を×・×と表してある。そして「ポスターセッションという発表メディアは、軽くみられてしまいがちである」という

短所がある、と考えている研究者については選んだ位置に黒丸（●）が付いている。

「ポスターセッションは、口頭発表よりも審査基準が緩やかでランクが低い」とみなしている研究者は、日本分子生物学会よりも日本認知科学会の方が多いのだが、なかでも自分がポスターで発表をしたことがない研究者が、特にそのように考えている傾向がある（221, 222, 223, 225, 226, 227, 228）。この7人は、ポスターセッションはランクが低いとみなしているために、自分からポスターでの発表を拒否しているのだろうか。これに対して、発表に際して、もしポスターセッションと口頭発表を選択できるとしたら、どちらを選ぶか、という質問に対して7人とも「口頭発表を選択する」を選んでいくことがわかる。しかもその中の222, 223, 225, 228は、「ポスターセッションは口頭発表よりも軽くみられてしまうから」という理由で「口頭発表を選択する」を選んでいた。これに比べて、日本分子生物学会には、ポスターセッションはランクが低いとみなしており、しかも口頭発表よりも軽くみられてしまうということを短所だと考えていても、自分が発表をするときにはポ

表1 ポスターセッションは口頭発表よりもランクが低い、とみなしている研究者

回答者 番号	発表を したこと があるか	参加者に 対しての短所			発表者に 対しての短所			発表に 際しての 選択	ポスターセッションは 発表の チャンスを 広げるか	口頭発表より 効果は 上がるか	地位	年齢
		1位	2位	3位	1位	2位	3位					
181	○・○	●			●			ポスター	○	×	1	1
182	○・○	●			●			ポスター	○	×	1	3
115	○・○			●				口頭	○	○	4	2
117	○・○							ポスター	○	○	4	2
128	○・○			●			●	ポスター	○	○	4	3
132	○・○			●				口頭	○	×	5	2
137	○・○	●					●	口頭	○	×	6	2
204	○・○	●			●		●	口頭	×	×	3	3
216	○・○	●			●			口頭	○	○	6	3
217	○・○		●				●	口頭	○	○	6	4
221	×	○			／	／	／	口頭	×	×	4	2
222	×	○	●		／	／	／	口頭	○	×	4	2
223	×	○		●	／	／	／	口頭	○	×	4	5
225	×	○	●		／	／	／	口頭	○	○	5	2
226	×	○	●		／	／	／	口頭	○	×	6	2
227	×	×	／	／	／	／	／	口頭	○	×	1	2
228	×	×	／	／	／	／	／	口頭	無回答	無回答	2	5

注記 地位

1—企業所属の研究員 2—大学教授 3—大学助教授 4—大学助手・講師等 5—大学院生 6—その他

年齢

1—25歳未満 2—25～34歳 3—35～44歳 4—45～54歳 5—55～64歳 6—65歳以上

スターセッションを選ぶつもり研究者もいる(101, 102, 128)。しかし115のように口頭発表を選ぶつもり研究者もいる。そして115や108は、「ポスターセッションの会場の方がせまい場合が多い」という理由で「口頭発表を選択する」を選んでいった。

またポスターセッションはランクが低いとみなしてはいても、ほとんどの研究者は「発表のチャンスを広げるものとなる」とも考えていることがわかる。しかし「口頭発表よりも効果が上がる」と考えている研究者は少ない(17人中6人)。

さらに研究者の地位と年齢をみると、日本分子生物学会では、年配の研究者よりも44歳までの若い研究者の方に、ランクが低いとみなしている人が多いことがわかる。これに比べて、日本認知科学会では、ランクが低いとみなしている研究者の年齢はばらついていた。ただ、55～64歳という年配の回答者は2人しかおらず、その2人ともがランクが低いとみなしている、というのは目立った。

ところで、「ポスターセッションは口頭発表よりもランクが低い」とはみなしていない、つまり表1に載っていない研究者の中で、「ポスターセッションという発表メディアは、軽くみられてしまいがちである」ということを短所だと考えている(参加者にとっての短所、発表者にとっての短所1～3位のどこかで挙げていれば数えることにした)研究者は、日本分子生物学会では32人中15人もいた。しかし日本認知科学会では19人中3人のみであった。

表1からわかったように、研究者のなかには、ポスターセッションのことを口頭発表よりもランクが低い発表メディアだとみなしている人々もいる。

しかし、それよりも重大な問題点があるのではないだろうか。実際、「ポスターセッションは口頭発表よりランクが低い、と見る人が多いのでこまる」という意見を書いていた研究者もいた。このように、ポスターセッションのこと

をランクが低い発表メディアだとは自分ではみなしてなくても、他の人にはポスターセッションという発表メディアは軽くみられてしまう、と考えている研究者は多数いることがわかった。これは憂慮すべき問題点だと思われる。つまり、自分の研究成果を他の研究者に向けて発表し、意見の交換などをしたいと考えているとき、その見聞してもらう他の研究者がポスターセッションのことを軽くみているかもしれない、と考えたならば、いくら自分では口頭発表と同等だとみなしていても、ポスターセッションという発表メディアを活用する研究者は減っていったしまうように思われる。

4.2 ポスターセッションの長所と短所

研究者はどのような事柄をポスターセッションの長所・短所としてとらえているのかを、発表者、参加者両方の立場から示すことにする。

なお調査では、長所・短所だと思う順に1位から3位までを選んでもらっている。1位から3位まで順位をつけて選ばれているのだから、その順位を考慮するため重み付け(1位は3倍、2位は2倍にする)をして表すことにした。例えば、ある選択肢について、1位に選んだのが6人、2位が5人、3位が11人だったとする。この場合、重み付けをして $39 (= 6 \times 3 + 5 \times 2 + 11)$ というのが、この選択肢のポイント数となる。そしてこの選択肢ごとのポイント数で、長所・短所を図に表すことにした。

まず発表者にとっての長所(図2参照)と短所(図3参照)をみってみる。どちらも、左側が日本分子生物学会、右側が日本認知科学会である。

発表者にとっての長所としては、やはり「1対1や少人数で、じっくりとつっこんだ議論をすることが可能」なことを最も重大な長所としてとらえていることがわかる。

そして発表者にとっての短所としては、「何度も同じ説明を繰り返さなければならない」と

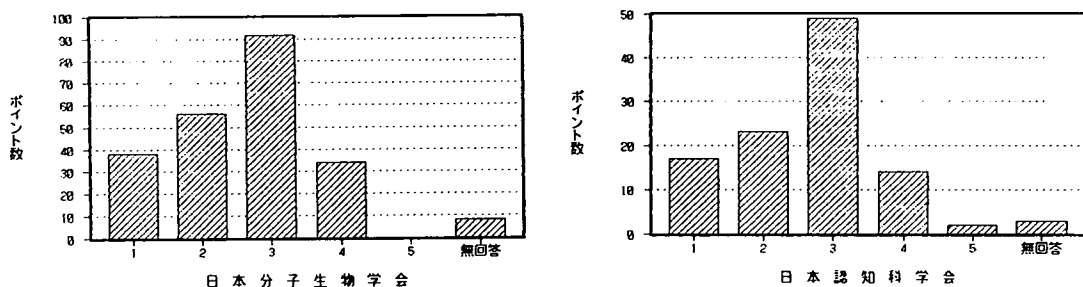


図2 発表者にとってのポスターセッションの長所

- 注記
- 1 ポスターを見ている人の反応が直接わかる。
 - 2 研究内容を説明する時間を気にしなくてもよい。
 - 3 1対1や少人数で、じっくりとつっこんだ議論をすることが可能である。
 - 4 今まで知らなかった研究者と知り合いになることが可能である。
 - 5 その他

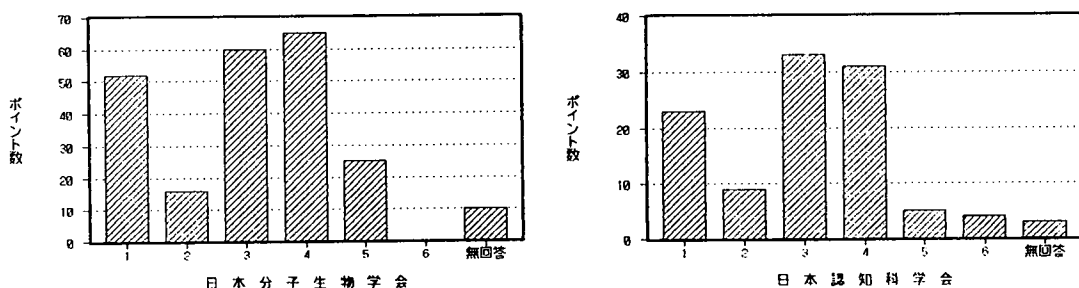


図3 発表者にとってのポスターセッションの短所

- 注記
- 1 ポスター作成の準備に時間や費用がかかる。
 - 2 スペースが限られているので、十分な量のデータを発表できない場合がある。
 - 3 何度も同じ説明を繰り返さなければならない。
 - 4 自分の場所を離れることができないとき、他の人のポスターを見聞きすることができない。
 - 5 ポスターセッションという発表メディアは、軽くみられてしまいがちである。
 - 6 その他

ということ、「自分の場所を離れることができないとき、他の人のポスターを見聞きすることができない」ということを短所としてとらえている研究者が多いことがわかる。

次に参加者にとっての長所(図4参照)と短所(図5参照)をみる。

やはり、参加者にとっても「発表者や他の参加者と1対1や少人数で、じっくりとつっこんだ議論をすることが可能」な点が、重大な長所としてとらえられていることがわかる。

ただ、この参加者にとっての長所以外は、日本分子生物学会と日本認知科学会とで、それほ

ど大きな差はないのだが、この参加者にとっての長所では、「発表者が不在でも研究成果を見ることができる」ということを、日本分子生物学会では日本認知科学会よりも多くの研究者が長所としてとらえているのが目立つ。これは、日本分子生物学会の方が発表者その場からいなくなってしまうことが多いことの表れなのだろうか。

参加者にとっての短所としては、「見ようと思っても、混雑している場合がある」ということと、「ある1つのポスターに興味を持ち、その発表者と話をしたいと思っても、他の人と話

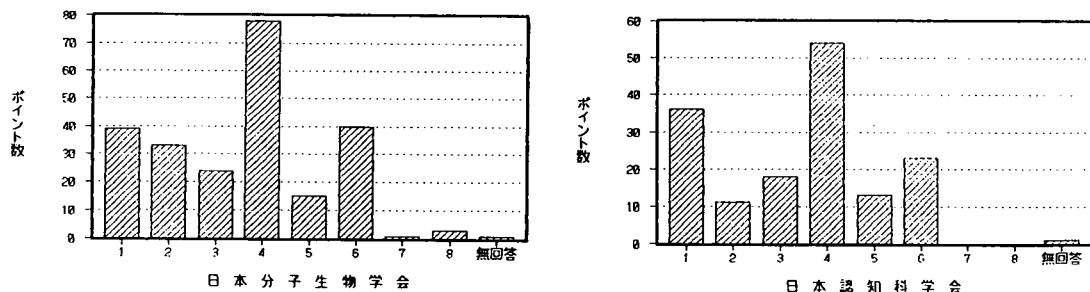


図4 参加者にとってのポスターセッションの長所

- 注記
- 1 興味のあるものだけを選んで、見聞きすることができる。
 - 2 発表者が不在でも研究成果を見ることができる。
 - 3 口頭発表では質問しづらくても、ポスターセッションならば気軽に質問をすることができる。
 - 4 発表者や他の参加者と1対1や少人数で、じっくりとつっこんだ議論をすることが可能である。
 - 5 今まで知らなかった研究者と知り合いになることが可能である。
 - 6 OHPやスライドは見逃してしまう場合もあるが、ポスターはじっくり見ることが可能である(時間を気にしなくてもよい)。
 - 7 外国で、発表者の話していることが分からなかったり、会話ができなくても、ポスターを見ればおおよその内容を理解することができる。
 - 8 その他

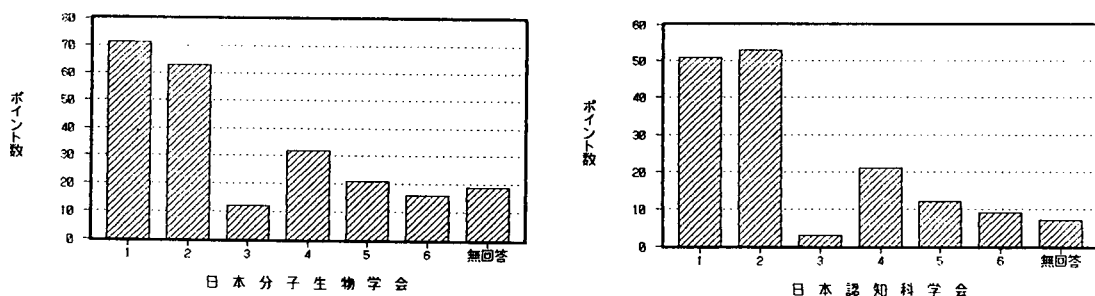


図5 参加者にとってのポスターセッションの短所

- 注記
- 1 見ようと思っても、混雑している場合がある。
 - 2 ある一つのポスターに興味をもち、その発表者と話をしたいと思っても、他の人と話しこんでいて、話ができない場合がある。
 - 3 興味を引く発表が少ない。
 - 4 ポスターセッションというメディアは、軽くみられてしまいがちなので、1つ1つの発表の印象も薄くなってしまふ。
 - 5 歩き回ることになるため、身体的疲労が大きい。
 - 6 その他

し込んでいて、話ができない場合がある」ということを、短所ととらえている研究者が多いことがわかる。

ここまでみてきて、研究者は、例えば時間を気にせずじっくりと「研究についての有意義なアイディアの交換」をするなど、口頭発表では不可能に近いと思われる「1対1や少人数での

じっくりとつっこんだ議論」が可能という点では、皆ポスターセッションを価値があるものと評価していることがわかった。

ところで、ここで示した短所は本当に短所なのだろうか。見聞しに来てくれた参加者に対して毎回説明をすることになるから、発表者は「何度も同じ説明を繰り返さなければならない」

と感じてしまうのだろう。しかし、参加者ごとに毎回説明を繰り返すからこそ、「1対1や少人数での議論」にもつながるのであろう。また、参加者が「見ようと思っても、混雑している場合がある」、「ある1つのポスターに興味を持ち、その発表者と話をしたいと思っても、他の人と話し込んでいて、話ができない場合がある」と感じているのも、発表者と「1対1や少人数での議論」をしたいと考えているときの目の前の光景なのだろう。

つまり、発表者、参加者に短所としてとらえられている「何度も同じ説明を繰り返さなければならない」、「見ようと思っても、混雑している場合がある」、「ある1つのポスターに興味を持ち、その発表者と話をしたいと思っても、他の人と話し込んでいて、話ができない場合がある」は、研究者がポスターセッションの重大な長所としてとらえている「1対1や少人数で、じっくりとつっこんだ議論をすることが可能」ということの裏返しであって、本質的な短所ではないように思われる。

しかし、発表者がとらえている「自分の場所を離れることができないとき、他の人のポスターを見聞きすることができない」ということは、ポスターセッションの重大な短所である。

4.3 インフォーマル・コミュニケーションへの活用

前節で、研究者にとってのポスターセッションの長所と短所が示された。そこでここでは、その中でも特にインフォーマル・コミュニケーションに関わると思われる「1対1や少人数での議論」と「今まで知らなかった研究者と知り合いになることができる」という2つを取り上げて、この2つについて研究者がどのようにとらえているのかを示すことにする。

表2は、日本分子生物学会の回答者全員、および日本認知科学会の中で、自分がポスターで発表をしたこともなく、他の人の発表を見聞し

たこともない回答者を除いた26人が、「1対1や少人数での議論（●）」と「今まで知らなかった研究者と知り合いになることができる（◎）」という2つについて、どのようにとらえているのかを表している。

この表から、両学会の研究者ともに、参加者としても（65人中53人、全体の82%）、発表者としても（56人中55人、全体の98%）、「1対1や少人数で、じっくりとつっこんだ議論をすることができる」ということはポスターセッションならではの重大な長所として、とらえられていることがわかる。なかでも、発表者として挙げていない研究者は1人だけであった（101）。ここから、特に発表者にとっては重大だということがわかる。

次に、「ポスターセッションを通して今まで知らなかった研究者と知り合いになることができる」と考えているかどうかについてだが、一番重要なことだとは考えられていない。（しかし、日本認知科学会の研究者である211だけは、参加者にとっても、発表者にとっても「今まで知らなかった研究者と知り合いになることができる」ということを長所の1位に挙げている。また「知り合いが増えるので、ポスターセッションは好き」という意見も書いていた。若い211にとっては、「1対1や少人数で議論」ができることよりも、「今まで知らなかった研究者と知り合いになる」ことの方が重要なのだろう。）しかし表をよく見てみると、2位以下に「今まで知らなかった研究者と知り合いになることができる」を挙げている研究者は多いことがわかる。

なかには、「知り合いが発表をしていると、そのポスターの前を通り過ぎることはできない、知っている研究者が見聞しに来てくれると、その人と話しがちになってしまう」という意見もあった。これらは研究者独特というよりも、集団の中では普通にみられる、避けることのできない人づきあいなのだろう。

ところで、前節でも示したように、1対1や

表2 「1対1や少人数での議論」と「今まで知らなかった研究者と知り合いになることができる」ということについて

日本分子生物学会												
回答者 番号	発表を したこと があるか	参加者に とっての長所			発表者に とっての長所			参加者に とっての短所				
		1位	2位	3位	1位	2位	3位	1位	2位	3位		
101	○・○	●			●							
102	○・○	●			●							△
103	○・○	●	●		●	●				△		
104	○・○	●			●	●						
105	○・○	●	●		●	●						
106	○・○	●	●		●	●					△	
107	○・○	●	●	●	●				△			
108	○・○	●	●		●				△	△		
109	○・○	●	●	●	●				△	△		
110	○・○	●	●		●				△	△		
111	○・○	●		●	●							
112	○・○	●	●		●					△		
113	○・○	●	●		●				△			
114	○・○	●	●		●					△		
115	○・○	●	●		●						△	
116	○・○	●	●		●					△		
117	○・○	●	●	●	●					△		
118	○・○	●	●		●					△		
119	○・○	●	●		●							
120	○・○	●	●		●				△			
121	○・○	●	●		●				△			
122	○・○	●	●		●				△			
123	○・○	●	●		●							
124	○・○	●	●		●				△			
125	○・○	●	●	●	●				△	△		
126	○・○	●	●	●	●				△	△		
127	○・○	●	●	●	●				△	△		
128	○・○	●	●	●	●				△	△		
129	○・○	●	●		●					△		
130	○・○	●	●		●					△		
131	○・○	●	●		●						△	
132	○・○	●	●		●				△			
133	○・○	●	●		●							
134	○・○	●	●	●	●							
135	○・○	●	●		●				△			
136	○・○	●	●		●							
137	○・○	●	●	●	●							
138	○・○	●	●		●					△		
139	○・○	●	●	●	●				△			

日本認知科学会												
回答者 番号	発表を したこと があるか	参加者に とっての長所			発表者に とっての長所			参加者に とっての短所				
		1位	2位	3位	1位	2位	3位	1位	2位	3位		
201	○・○	●			●						△	
202	○・○	●			●						△	
203	○・○	●			●						△	
204	○・○	●	●		●						△	
205	○・○	●	●		●	●			△			
206	○・○	●	●		●	●			△	△		
207	○・○	●	●		●	●			△	△		
208	○・○	●	●	●	●				△			
209	○・○	●	●		●				△			
210	○・○	●	●		●	●			△			
211	○・○	●	●		●	●			△			
212	○・○	●	●		●				△			
213	○・○	●	●		●				△			
214	○・○	●	●		●				△			
215	○・○	●	●		●				△			
216	○・○	●	●	●	●	●			△			
217	○・○	●	●		●							
218	○・○	●	●		●						△	
219	○・○	●	●		●							
220	○・○	●	●		●							△
221	○・○	●	●		●				△			
222	○・○	●	●		●						△	
223	○・○	●	●		●						△	
224	○・○	●	●		●						△	
225	○・○	●	●		●						△	
226	○・○	●	●		●						△	

少人数でじっくりと議論ができるということは、反対に、一度議論が始まってしまったら、その輪の中に入っていくのは難しい、ととらえられているのではないだろうか。そこで、参加者にとっての短所として「ある1つのポスターに興味を持ち、その発表者と話をしたいと思っても、他の人と話し込んでいて、話ができない場合がある」ということを挙げている研究者を三角(△)で表してみた。その結果、65人中47人(72%)と、大半の研究者が短所としてとらえていることがわかった。

ここまでみてきて、「今まで知らなかった研究者と知り合いになって」今まで以上にインフォーマル・コミュニケーションのネットワークを広げよう、ということを第一の目的としてポスターセッションを活用する研究者は少ない。しかし

皆、ポスターセッションを活用することによって、副次的に「今まで知らなかった研究者と知り合いになることができる」とは考えている。そして、研究者は「1対1や少人数での議論」が可能ということを念頭におきながら、ポスターセッションを活用することによって、インフォーマル・コミュニケーションのネットワークを広げている、と言える。

4.4 発表の際にどちらを選ぶか

発表に際して、ポスターセッションと口頭発表を選択できるときどちらを選ぶか、という質問に対して、日本分子生物学会の研究者で「ポスターセッションを選択する」を選んだのは39人中21人(全体の54%)、「口頭発表を選

表3 「ポスターセッションを選択する」と「口頭発表を選択する」を選んだ理由

「ポスターセッションを選択する」	「口頭発表を選択する」
<p>a) じっくりとつっこんだ議論をすることが可能だから。</p> <p>b) 前日までポスターを作成していただけるから</p> <p>c) ポスターセッションが有意な経験となるから</p> <p>d) 口頭発表での音声による一時的な情報に比べて、文字や図表の提示は情報としての効率がたいへんよいから</p> <p>e) 手軽にできるから・気軽だから</p>	<p>a) 多くの人に一度に伝えることができるから（ポスターセッションには人数に限りがあるから）</p> <p>b) 自分の発表時間が短くてすむため、他の人の発表を多く聞けるから</p> <p>c) OHPやビデオでした発表できないものが多いから</p> <p>d) ポスターセッションの方が口頭発表に比較して軽くみられてしまうから</p> <p>e) ポスター作成の準備に時間や費用がかかるから</p> <p>f) ポスターセッションは、質問が多岐にわたったり長時間拘束されて疲れるから</p>

択する」を選んだのは16人（41%）であった。そして日本認知科学会では、「ポスターセッションを選択する」を選んだのは29人中11人（38%）、「口頭発表を選択する」を選んだのは14人（48%）であった。日本分子生物学会では「ポスターセッションを選択する」、日本認知科学会では「口頭発表を選択する」を選んだ研究者の方が若干多かったが、あまり大きな違いではないように思われる。

表3では、「ポスターセッションを選択する」と「口頭発表を選択する」、それぞれを選んだ理由として挙げられていたものの中から多かったものと興味深いものをまとめてみた。

「ポスターセッションを選択する」を選んだ研究者のうち、約半数はa) じっくりとつっこんだ議論をすることが可能だから、という理由であった。この他にも、4.2節で示したような長所がポスターセッションにはあるから、という理由で「ポスターセッションを選択する」を選んだ研究者も多かった。なかには、具体的に「口頭発表は研究のささいな質問や批判的質問で終わってしまい、研究の向上性という視点からは効果のないことが多い」から「ポスターセッションを選択する」を選んだという研究者

もいた。この理由はa)につながるものだと思うられるが、全体的にみて、「ポスターセッションを選択する」を選んだ研究者は、ポスターセッションのよい面をみて、積極的に選んでいる人が多いように思われる。

これに比べて、「口頭発表を選択する」を選んだ研究者のなかには、d) ポスターセッションの方が口頭発表に比較して軽くみられてしまうから、e) ポスター作成の準備に時間や費用がかかるから、というようにポスターセッションの短所を挙げて「口頭発表を選択する」を選んだ人も多かった。これは「口頭発表を選択する」を積極的に選んでいるというよりは、ポスターセッションを避けるため「口頭発表を選択する」を選んでいる、とみることもできると思われる。なかには、a) 多くの人に一度に伝えることができる、c) OHPやビデオでしか発表できないものが多いから、「口頭発表を選択する」を選んだ研究者もいた。このなかでも特に、a) 多くの人に一度に伝えることができる、というのはポスターセッションでは難しい口頭発表ならではの利点である。この理由で「口頭発表を選択する」を選んだ数人の研究者は、口頭発表のよい面をみて選んでいる例だと思われる。

る。

4.5 発表者が不在の場合

発表者がその場にいない(=不在)ということ、参加者がどのようにとらえているのかについては、4.2節で表した図4の選択肢2「発表者が不在でも研究成果を見ることができる」が該当している。これによると、日本認知科学会よりも多く、日本分子生物学会の中には長所をとらえている研究者もいることがわかる。しかし反対に、「質問したいときに発表している人がいない、長い時間その場に立ってほしい」、「なかには貼るだけ貼って、発表時間には現れないような人もいる」と書いている日本分子生物学会の研究者もいた。

なお、調査票の質問項目「参加者にとってのポスターセッションの短所」に、「発表者がその場にいないことがある」という選択肢をいれなかったのは失敗である。

そして、発表者は自分と同じ発表時間帯の他の人のポスターを見聞できないことを、とても重大な短所だととらえていることもわかった(このことは4.2節の図3に表れている)。

たしかに、発表者が不在というのは喜ばしいことではない。しかし、発表者も同じ時間帯に興味のある発表があったら、1人の参加者として見聞しに行きたくなるのもわかる。幸いなことに、現状として「発表者が不在でも研究成果を見ることができる」ということをポスターセッションの長所としてとらえている研究者もいるのだから、自分が必ずポスターの前にいる時間を示しておくなど工夫をこらすとともに、もう少し自分が不在の場合を考慮してポスターを作成したらどうだろうか。ただ、これは研究者だけの問題ではなく、学会のプログラムも影響してくるのだと思われる。

4.6 参加者に対する接し方

参加者に対して、どのように接すると良いと思うか、という質問に対して、日本分子生物学会では「あまり説明はしないで、まずは見てもらい質問されたら答える」ようにしている、逆に日本認知科学会では「積極的に自分から内容を説明する」ようにしていると答えた研究者が若干多かった。しかし、これはその場の雰囲気と発表する研究者の好みだと思われる。

4.7 学際的な学会と専門分化した学会との比較

最後に、学際的な学会(日本認知科学会)と専門分化した学会(日本分子生物学会)との比較という点から4章をみると、この2つの学会にあまり大きな違いはないように思われる。そして、学際的な学会と専門分化した学会とを比較してみようとするきっかけとなった、「学際的な学会ではポスターセッションによって自分の専門外の内容にも入っていき、気軽に質問や議論をしたりしながら広く顔見知りになることができる」と考えている研究者がいるかもしれない」という考えを裏付けるような結果は得られなかった。

しかし、日本認知科学会の研究者のなかに、「発表を行う主題によっては、ポスターではダメなものもある」、「OHPやビデオでしか発表できないものが多い」という意見があった。このことは、ポスターでの発表にむかない主題、研究もあるのだ、ということを示唆している。

5. 結論

最初に、本研究で明らかになったことをまとめてみることにする。

ポスターセッションが口頭発表と大きく違う点は、1対1や少人数でじっくりとつこんだ議論をすることが可能、ということである。こ

こから、「口頭発表」や「学術雑誌」のような発表メディアとは違い、研究成果に対する他の研究者の意見や批評を得るためという「学会発表」本来の目的を達成するためには、「ポスターセッション」という発表メディアはとても有効である、と言うことができると思われる。

そして、ポスターセッションの主体者である研究者も、じっくりとつっこんだ議論を求めて、つまりインフォーマル・コミュニケーションのネットワークを広げるために「ポスターセッション」という発表メディアを活用している、と言うことができる。

ポスターセッションは口頭発表よりもランクが低い、とみなされてしまうことがあるかもしれない。ポスターセッションは発表する側にとっても、見聞する側にとっても疲れる発表メディアかもしれない。しかし実際には、どちらか一方だけが優れているというわけではなく、「ポスターセッション」も「口頭発表」もそれぞれ独立した発表メディアとして存在し、研究者によって使い分けられているのだといえる。

以上のようにまとめることができたが、今回の調査で心残りな点が1つある。それは、日本分子生物学会と日本認知科学会、両学会を合わせても回収数が少なかったということである。もっと多くの研究者に調査票を配布した方がよかったのかもしれないが、なぜこのように回収数が少なくなってしまったのだろうか。考えられる理由としては、質問の数が多すぎたため、めんどうだと思われてしまった、ポスターによる発表をしたことがなく興味を持ってもらえなかった（現に、日本分子生物学会では回収できた39通のうち、ポスターによる発表をしたことがない研究者で回答をしていただけたのは1人のみであった）ということ挙げることができる。また、調査票を郵送した時期が大学の休みと重なってしまったことも原因と考えられる。

また、予備調査からは、ポスターセッションに対する本音を調査票以上に引き出すことができた部分もあるように思われる。

たしかに回収数は少なかった。しかし、本研究の目的である、研究者のポスターセッションに対する意識については明らかにできたと思われる。

これからポスターセッションに関する大規模な実態調査が行われるとしたとき、本研究はその予備調査としての役割を十分に果たしていると思われる。特に調査項目は今後も利用できていると思っている。

しかし、いろいろ不満な点も残っている。例えば、年齢や地位による、ポスターセッションに対するとらえ方などについてもみてみたかったが、どちらかという年配の方からの回答が少なく、差が出てそれは偶然なのか、意味があることなのかはわからなかった。回収数が少なかったのが第一の原因なのだが、名簿から無作為に調査対象を抽出したため、もともと年配で、高い地位に就いておられる研究者が何人含まれていたのかはわからない。このような年齢や地位によるポスターセッションに対するとらえ方の違いは今後の課題である。

また、ポスターセッションに関する研究には、まだまだ以下のような課題が残っている。

- どの分野のどの学会でどれくらい行われているのか
- 学会の方針としてポスターセッションはどのような立場に置かれているのかといった、学会の運営側からみたポスターセッション
- 本研究で完全に明らかにすることができなかったポスターセッションの歴史

これらは今後の課題となるだろう。

謝辞

本稿は、平成7年度愛知淑徳大学文学部図書館情報学科卒業論文をまとめたおしものである。研究を進めるにあたり、懇切丁寧なご指導をいただいた、愛知淑徳大学図書館情報学科の

村主朋英助教授に深く感謝の意を表する。また、本学の竹村彰祐教授、実習助手の草田直子さんにもいろいろとお世話になった。ここに深く感謝の意を表する。さらに、名古屋大学理学部分子生物学科の宮崎正澄教授、予備調査に協力をいただいた東北大学医学部講師の上原茂樹さん、名古屋大学理学部分子生物学科助手の田上英明さん、名古屋大学工学部助手の梶田将司さんをはじめとして、アンケート調査の実施にあたり協力をいただいた日本認知科学会事務局および日本分子生物学会所属の研究者の方々、日本認知科学会所属の研究者の方々にあつくお礼を申しあげる。

文献リスト

- [01] 津田良成編. 図書館・情報学概論. 第2版. 東京, 勁草書房, 1990, 240p.
- [02] 上田修一, 倉田敬子. 情報の発生と伝達. 東京, 勁草書房, 1992, 229p. (図書館・情報学シリーズ1)
- [03] 川口吉太郎ほか. 上手な学会発表のために: MacとIBM-PCによるプレゼンテーション. 東京, 秀潤社, 1993, 266p.
- [04] Maugh, T.H. Poster sessions: a new look at scientific meetings. *Science*. Vol.184, p.1361(1974)
- [05] Stibic, V. 知的生産の技術と方法: ツール・オブ・マインド. 中村幸雄監訳. 東京, オーム社, 1984, 329p.
- [06] Eisenschitz, T.S; Knox, J; Oppenheim, C; Richards, K; Wittels, P. Poster sessions as a medium of scientific communication. *Journal of Research Communication Studies*. Vol.1, No.3, p.235-242(1979)
- [07] 森川 陽, 大倉一郎, 高橋孝志. 学会発表の上手な準備: ポスター・OHP・スライドのてぎわよい作り方. 東京, 講談社, 1990, 74p.
- [08] Naryshkin, S. The poster session: a missed opportunity. *Diagnostic Cytopathology*. Vol.7, No.5, p.449-450(1991)
- [09] Communicating through poster sessions. *IEEE Transactions on Professional Communication*. Vol.PC-22, No.3, p.137-140(1979)
- [10] Sexton, D. Presentation of research findings: the poster session. *Nursing Research*. Vol.33, No.6, p.374-375(1984)
- [11] Caliendo, M.A. Poster session presentations: their impact on biophotography and the process of preparation. *Journal of Biological Photography*. Vol.53, No.1, p.5-8(1985)
- [12] Kroenke, K. Poster sessions. *The American Journal of Medicine*. Vol.83, No.6, p.1129-1130(1987)
- [13] Coulston, A.M; Stivers, M. A poster worth a thousand words: how to design effective poster session displays. *Journal of the American Dietetic Association*. Vol.93, No.8, p.865-866(1993)
- [14] Morra, M.E. How to plan and carry out your poster session. *Oncology Nursing Forum*. Vol.11, No.2, p.52-57(1984)
- [15] Gyeszly, S.D. Poster preparation for ALA Auual Conference. *College & Research Libraries News*. Vol.51, No.6, p.532-533(1990)
- [16] Macgregor, A.J. Preparing poster talks. *IEEE Transactions of Professional Communication*. Vol.PC-21, No.3, p.103-105(1978)
- [17] Renner, W.E; Wardin, C; Newton, G. Poster session displays. *Journal of Biological Photography*. Vol.53, No.1, p.31-34(1985)
- [18] 加藤史子. 学会発表におけるポスターセッションの現状: 「日本分子生物学会」と「日本認知科学会」を対象として. 愛知, 愛知淑徳大学, 1995, 37p. 文学部図書館情報学科卒業論文.

付録 調査票

ポスターセッションに関する調査

愛知淑徳大学文学部図書館情報学科

村主研究室 加藤史子

この調査は学会発表の一形態である「ポスターセッション」についてのものです。研究者がそれをどのようにとらえているかを明らかにしたいと思います。そして「ポスターセッション」を、研究成果を発表するための情報メディアととらえ、学術情報の流通過程の中でどのような位置を占めているかを明らかにしようとするものです。

アンケートの調査結果は全て統計的に処理いたしますので、プライバシーを侵害するようなことはありません。また無記名で結構です。

お忙しいところ恐縮ですが、どうかご協力下さいますよう、お願いいたします。

1) 貴方は実際に、ポスターで発表をされたことがありますか。

(1つだけ○を付けて下さい)

1. 発表をしたことがある(他の人の発表を聞いたこともある)
2. 発表をしたことはあるが、他の人の発表を聞いたことはない
3. 発表をしたことはないが、他の人の発表を聞いたことはある
4. 発表をしたことも他の人の発表を聞いたこともない

質問1)で、1, 2を選ばれた方は、以後全ての質問にお答え下さい。

3を選ばれた方は、質問2)～4), 12)～16)のみお答え下さい。5)～11)はお答え下さらなくても結構です。

4を選ばれた方は、質問12)～16)のみお答え下さい。2)～11)はお答え下さらなくても結構です。

★参加者(ポスターセッションを聞く側)に関する質問★

2) 貴方はどのようなポスターが見やすく、わかりやすいと思われますか。ア～ウそれぞれについてお答え下さい。(それぞれどちらか一方に○を付けて下さい)

ア) 1. 文字中心のポスター

2. 図(イラスト, モデル, グラフ), 表を多用したポスター

イ) 1. コンピュータを利用して作成してあるポスター

2. 手書きのポスター

ウ) 1. カラフルなポスター

2. 白黒のポスター

3) 以下に示す項目は、参加者(ポスターセッションを聞きに来ている人々)にとって、口頭発表と比べたポスターセッションの長所だと考えられます。貴方が特に優れていると思われる順に上位みっつを選んで下さい。

3 位

- 4) 参加者（ポスターセッションを聞きに来ている人々）にとって、口頭発表と比べたポスターセッションの短所として以下のものが考えられます。貴方が短所だと思われる順に上位みつを選んで下さい。

3 位

- ### ★ポスターの作成について★

重要ではない

- 28 —

自己アピールをする。

5. 自分（発表者）が不在の場合を考慮して、ポスターを見ただけでも内容を理解することができるように、くわしいポスターを作成する。
6. 自分（発表者）が不在の場合や混雑している場合を考慮して、配布資料を準備しておく。
7. 図（イラスト、モデル、グラフ）、表を多用する。
8. きれいに、見やすいように配置する、色を考えるといた、ポスターのデザインの美しさを考慮する。
9. その他（ ）

6) 貴方は何を使ってポスターを作成されますか。(ひとつだけ○を付けて下さい)

1. コンピュータ 2. 手書き
3. その他 ()

なお、1を選ばれた方は、特にどのような機種とソフトウェアを利用なさっているか、その名称をお書き下さい。

例) 機種-Macintosh ソフト-ChemDraw Plus3.0

機種 ソフト

7) 貴方は、口頭発表の準備とポスターセッションの準備と、どちらの方が手間がかかると思われますか。(どちらか一方に○を付けて下さい)

1. 口頭発表 2. ポスターセッション

また、それはどのような手間でしょうか。ご自由にお書き下さい。

8) ポスターに書くべき中身として、以下のものが考えられます。貴方が特に重要だと思うものをひとつ選び○を付けて下さい。

1. 研究の概略（目的・結論） 2. 方法や主だった結果
3. その他（ ）

★ポスターセッションで発表する際の質問★

9) 参加者（ポスターセッションを聞きに来ている人々）に対して、貴方はどのように接すると良いと思われますか。（どちらか一方に○を付けて下さい）

1. あまり説明はしないで、まずは見てもらい質問されたら答えるようにする。
2. 積極的に自分から内容を説明するようにする。

10) 以下に示す項目は、発表者にとって、口頭発表と比べたポスターセッションの長所だと考えられます。貴方が特に優れていると思われる順に上位みつを選んでも構いません。

- 1 位 2 位 3 位

1. ポスターを見ている人の反応が直接わかる。
2. 研究内容を説明する時間を気にしなくてもよい。
3. 1対1や少人数で、じっくりとつっこんだ議論をすることが可能である。

4. 今まで知らなかった研究者と知り合いになることが可能である。
5. その他 ()

11) 発表者にとって、口頭発表と比べたポスターセッションの短所として以下のものが考えられます。貴方が短所だと思われる順に上位みつつを選んで下さい。

1 位 2 位 3 位

1. ポスター作成の準備に時間や費用がかかる。
2. スペースが限られているので、十分な量のデータを発表できない場合がある。
3. 何度も同じ説明を繰り返さなければならない。
4. 自分の場所を離れることができないとき、他の人のポスターを見聞きすることができない。
5. ポスターセッションという発表メディアは、軽くみられてしまいがちである。
6. その他 ()

★その他★

12) 発表に際して、ポスターセッションと口頭発表を選択できるとしたら、どちらを選ばれますか。(どちらか一方に○を付けて下さい)

1. ポスターセッション 2. 口頭発表

また、それはなぜですか。質問10), 11) の選択肢を挙げていただくか、またはご自由にお書き下さい。

13) 貴方はポスターセッションに対してどのような考えをお持ちですか。以下ア～ウそれぞれについて、○か×を付けて下さい。

- ア) ポスターセッションは、発表のチャンスを広げるものとなる。 ()
- イ) ポスターセッションは、口頭発表よりも審査基準が緩やかでランクが低い発表の枠である。 ()
- ウ) ポスターセッションは、口頭発表よりも効果が上がる伝達手段である。()

14) ポスターセッションに関してお気付きの点がございましたら、ご自由にお書き下さい。

15) 貴方の現在の地位をお教え下さい。(1つだけ○を付けて下さい)

1. 企業所属の研究員 2. 大学教授 3. 大学助教授
4. 大学助手・講師等 5. 大学院生 6. その他 ()

16) 貴方の年齢をお教え下さい。(1つだけ○を付けて下さい)

1. 25歳未満 2. 25～34歳 3. 35～44歳
4. 45～54歳 5. 55～64歳 6. 65歳以上

質問は以上で終わりです。

ご協力ありがとうございました。

訂正とお詫び

第11巻（平成10年3月25日発行）の中で下記の箇所に誤りがありましたので、ここに訂正し、お詫び申し上げます。

記

◆加藤史子「学会発表におけるポスターセッションの位置付け：日本分子生物学会と日本認知科学会を対象とした調査に基づく考察」（9頁）

- 英文標題，および英文抄録11行目

- （誤）The Biology Molecular Society of Japan

- （正）The Molecular Biology Society of Japan

- 英文抄録12行目および14行目

- （誤）BMSJ

- （正）The Molecular Biology Society of Japan
